

## 訃報 Obituary

## 江原昭三博士 (1928-2008) を悼む

鶴崎展巨

〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101  
鳥取大学地域学部生物学研究室

鳥取大学名誉教授で1985年から8年間、本学会の会長をされた江原昭三先生 (鳥取大学名誉教授) が2008年10月7日に80歳で亡くなられた。



江原昭三先生  
(1980年, 72歳のお誕生日の日に撮影)

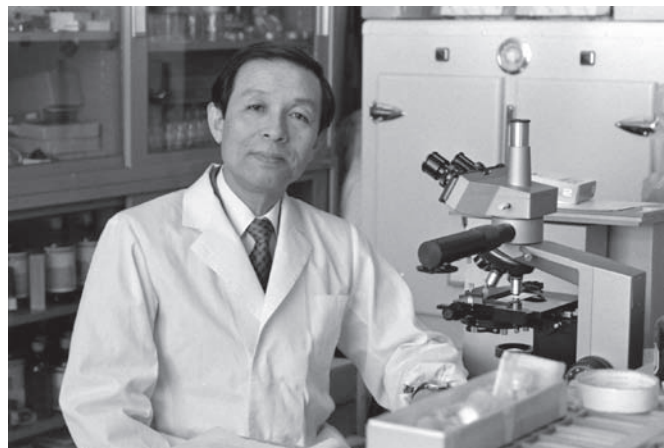
江原先生は1928年 (昭和3年) 5月5日、北海道小樽市のお生まれであるが、5歳のときに御尊父の江原玄治郎氏 (1881-1961: 群馬県出身。教育者として高名。北海道で旧制中学・新制高校の校長を歴任した) の転勤で札幌市に移られた。1951年に北海道大学理学部動物学科を卒業後、すぐに指導教官であった系統分類学講座の内田亨教授のもとで助手になられた。1967年10月に鳥取大学教育学部助教授に転任後、1971年に教授となり、1994年3月に鳥取大学を停年退官するまで鳥取大学では27年間、北海道大学における在職期間や鳥取大学退職後に教授として勤務した美作女子大学 (現、美作大学) での4年間を合わせるとじつに47年にわたって、大学教育者として数多くの学生を指導された。鳥取大学では評議員を6期12年間、附属図書館長を3年間務められるなど、絶えず大学運営の中核にも参画された。

鳥取県生物学会会長以外にも、ダニ類研究会 (日本ダニ学会の前身) の会長、国際ダニ学雑誌 (International Journal of Acarology, 米国) や分類・応用ダニ学雑誌 (Systematic and Applied Acarology, 英国) の編集委員、日本応用動物昆虫学会、日本昆虫学会、動物分類学会、日本土壌動物学会、日本ダニ学会などの評議員などを歴任され、諸学会の発展に寄与された。このうち国際ダニ学雑誌では、亡くなられるまで34年間連続で編集委員を務められた (この雑誌の編集委員の中で最長)。2007年には日本ダニ学会、日本蜘蛛学会の両学会で名誉会員とされている。鳥取県生物学会では1985年から1992年まで8年間会長を引き受けられた。私を知る

かぎりでは (私が鳥取にきたのは1987年なので、鳥取県生物学会のことについてはそれ以降のことしか知らない)、これは、会誌の発行や観察会の開催がスケジュールに対してもっとも正確に進行した期間であったように思う。

鳥取県関係ではそのほか、鳥取県自然環境保全審議会委員、鳥取県文化財保護審議会委員 (委員長を含む)、鳥取県立博物館協議会委員などを長年にわたって務められるなど、鳥取県の文化向上や自然保護に尽力され、2003年には文化財保護分野で、地域文化功労者文部科学大臣表彰を受けられた。

江原先生のライフワークはダニの分類学で、研究を開始された1950年代にはほとんど未解明であった日本およびアジア地域のハダニ類を中心とする植物寄生性ダニ類、およびそれらの捕食者であるカブリダニ類の分類研究を開拓・推進された。ハダニ類 (前气门亜目ハダニ科) は植物の葉裏などに生息し植物を吸汁する体長1mm足らずのダニであるが、増殖率がきわめて高く、農林業の重要害虫となっている。防除のための研究は古くからされていたが当時、種を正確に分類できる人が不在だった。研究着手後は林業上重要な針葉樹や果樹に寄生するダニを優先して、ぞくぞくと種名を決定されていたが、この業績は関係者に大いに歓迎され、1969年には「ダニに関する一連の研究」によって日本応用動物昆虫学会賞を受賞された。この間の1960年に「数種ダニ類の比較内部形態学の研究 (英文)」によって理学博士の学位を取得された。比較内部形態学はダニを開始する以前にカミキリムシなどを材料として取り組まれていた、先生の得意分野である。その後も植物ダニ類の分類を世界の第一線で牽引し、これまでに表した原著論文は156編、新種として記載されたダニは205種に及んでいる。1980年には日本で初めてのダニ類専門の図鑑である「日本ダニ類図鑑」、1993年には「日本原色植物ダニ図鑑」を編著者として出版して、日本のダニ学、および応用動物学を世界的レベルに高めるとともに日本の農林業を害虫防除の側面か



鳥取大学教育学部の研究室で (1983年5月)

ら支えた。これらの2冊の図鑑 (さらに1冊、茨城大学の後藤哲雄さんと共編の植物ダニ類の新しい図鑑が近く刊行予定) を含め、専門のダニ類を中心とした著書は30編以上あり、うち13編が単著あるいは編著者として関わられたものである。江原先生のダニ研究は鳥取県の農林業ともつながりが深かった。かつて、鳥取県産の梨を北米に輸出していたときに向こうの検疫でダニが見つかったが、江原先生の同定によってそのダニが北米にもふつうにいる種であることがわかり、輸出できなくなる事態を回避できたというエピソードを伺ったことがある。

江原先生はダニの分類に着手される以前、カミキリムシ類や植食性テントウムシ類を材料として一連の比較内部形態学の研究を



大山にてササからのハダニの採集風景  
(1979年8月)

をされていたが、それはそれぞれの系統を扱う研究分野で重要論文として最近でも引用されている、とくに後者はその後著しく発展している日本の植食性テントウムシ類の種分化研究の基礎を築いた仕事として評価が高い。

1994年に鳥取大学を退官されたあとは、津山市の

美作女子大学で4年間教鞭を執られたほかは、ご自宅で研究に専念された。退官直後は、昔お好きだったカミキリムシの採集などを再開したいなども語られていたが、その後もダニの研究から引退されることがなかったのは、農作物の重要害虫であるがゆえに続々と舞い込むハダニ類の同定依頼に誠実に応えなくてはという使命感からだったと拝察する。その後も亡くなる直前まで絶えず精力的に研究を続けられ、退官後に著わされた原著論文は54編に達した (しかもその多くは国際誌に掲載されている)。鳥取県生物学会の研究発表会や総会には退官後もほとんど欠かさず顔を出されていたので、多くの方はご存じと思われるが、年齢からは想像できないほど、いつも若々しくお元気のご様子だった。

ご健康そのものにみえた江原先生だったが、昨年末の健康診断で肺ガンが見つかり、今年1月中旬に右肺の部分切除を受けられ、その後は抗がん剤の治療に入り、治療で短期

間入院してはご自宅で過ごすという日々を過ごしておられた。ご自宅では、遺作となった「原色植物ダニ検索図鑑」の編集作業や江原先生が記載されたダニのタイプ標本を国立科学博物館や北大博物館に移管する作業に精を出されていた。後者については江原先生との共著論文のある大橋和典さん (住友化学) が7月以降連休を利用して大阪から手伝いにこられていた。私は江原先生とは9月に入ってから、北大博物館への移管や標本リストの原稿作成などの件で何度かメールをやりとりし、下旬にはこれが病院からの封書での連絡に変わったが、検査入院で10月にはまたご自宅に戻られると書かれていたので、あまりさしせまった心配はしていなかった。

ところが、「植物ダニ検索図鑑」の共編者である茨城大学の後藤哲雄さんから、図鑑の校正刷りを江原先生にお送りしていたところ、奥様から病状が悪くなって先生がもう校正をできる状態でないとの電話を受けたとのことで、急遽お見舞いに行くことにしたと10月3日にメールで聞いて、私も翌日、鳥取空港で後藤さんと上遠野富士夫さん (フシダニ類がご専門) に合流させていただいて、鳥取中央病院に向かった。後藤さんも上遠野さんも、かつて文献の複写をさせてもらいに江原先生のご自宅に何日も滞在したので、鳥取は初めてではないとお聞きした。

江原先生の奥様と、その日ちょうど岡山から見舞いに来られていたご子息の寛昭さんとからお聞きしたところでは、9月の入院で使った抗がん剤の副作用で左肺に肺炎をおこされ、急に具合が悪くされたとのことだった。その日の午後、江原先生は遠来の旧くから親しい研究仲間の来訪と、後藤さんから、国際ダニ学雑誌の編集幹事のPrasad博士が江原先生に34年間に及ぶ編集委員としての骨折りに対して感謝状を送ることになったというニュースを伝えられたことに喜ばれ、酸素マスク越しながらも楽しそうに話をされていた。しかし私たちが失礼してから数時間後に、急に容体が悪化して意識不明になられたと、あとから伺った。奥様から江原先生が21時37分に亡くなったと電話をいただいたのは7日の夜である。8日に通夜、9日午前中に葬儀がとりおこなわれた。

現在、江原先生が最後に完成させようとしてされていたタイプ標本の移管作業と、移管をアナウンスするためのリスト原稿は大橋さんと後藤さんの献身的なご努力により近く終了できる見込みである。江原先生の著書・論文のリスト、記載種のリストはワードファイルとして作成済みなので、ご入用の方は鶴崎 (ntsuru@rstu.jp) までメールでご請求いただきたい。ここに使用させていただいた写真はいずれも江原寛昭さんからお借りしたものである。御礼申し上げます。最後に江原先生が単著あるいは編著者として関わられた著作のみ、下記に掲載しておきたい (年代順)。なお本誌記事の文面は私が他学会 (日本蜘蛛学会など) の機関誌

に書いたそれらと大幅に重複していることをおゆるしいただきたい。

野村健一・江原昭三 (編著)1968, 原色 農林作物のダニ, 全国農村教育協会 (東京), 80 pp

野村健一・江原昭三 (編著)1972, 新版 原色農林作物のダニ, 全国農村教育協会 (東京), 128pp

江原昭三・真梶徳純 1975. 農業ダニ学. 全国農村教育協会 (東京), 328 pp.

江原昭三 (編著) 1980, 日本ダニ類図鑑, 全国農村教育協会 (東京), 298 pp.

江原昭三 (編著) 1990, ダニのはなし, I, 生態から防除まで. 技報堂出版 (東京), 229 pp.

江原昭三 (編著) 1990, ダニのはなし, II, 生態から防除まで. 技報堂出版 (東京), 223 pp.

江原昭三・高田伸弘 (編) 1992, ダニと病気のはなし, 技報堂出版 (東京), 214 pp.

江原昭三 (編著) 1993. 日本原色植物ダニ図鑑. 全国農村教育協会 (東京), 298 pp.

江原昭三・鶴崎展巨 (編) 1993, 鳥取県のすぐれた自然 (動物編) 鳥取県衛生環境部自然保護課発行 (鳥取市) 327 pp.

江原昭三・真梶徳純 (編著) 1996, 植物ダニ学, 全国農村教育協会 (東京), 419 pp.

江原昭三 1999, 虫屋の来た道, 日本図書刊行会 (東京), 177 pp.

江原昭三 (監修) 後藤哲雄 (編) 2000, ポケット版 植物ダニ図鑑. 日産化学工業株式会社 (東京), 110 pp.

江原昭三・後藤哲雄・上遠野富士夫・岡部貴美子 2007, 植物防疫 特別増刊号 No. 10. 植物ダニ類の見分け方. 日本植物防疫協会 (東京)

江原昭三・後藤哲雄 (近刊) 原色植物ダニ検索図鑑. 全国農村教育協会 (東京).

Obituary: Dr, Shôzô Ehara (1928- 2008) by Nobuo Tsurusaki